

## 例会記録

## 日本医史学会 4月例会

令和4年4月23日(土)  
オンライン開催

1. 第32回矢数医史学賞 受賞記念講演  
『『感染症と法の社会史』とコロナ禍』  
西迫大祐(沖縄国際大学)
2. 「日本の発明? 母子手帳の開発の歴史」  
中村安秀(日本WHO協会/  
大阪大学名誉教授)

## 日本医史学会 6月例会

令和4年6月25日(土)  
オンライン開催

1. 第34回矢数医史学賞 受賞記念講演  
『『医学とキリスト教』とこれまで, これからの医学史研究』  
藤本大士(日本学術振興会特別研究員PD/  
京都大学大学院)
2. 第34回矢数医史学賞 受賞記念講演  
『『洋学史研究事典』と医学史研究』  
青木歳幸(佐賀大学地域学歴史  
文化研究センター特命教授)

## 例会抄録

## ペラグラ再考

——歴史的変遷と課題——

伊藤 泰広

18~20世紀前半にヨーロッパやアメリカ南部で深刻だったペラグラが, 日本で注目されることは少ない. ペラグラ史を概観し, 現代での課題に触れる.

ペラグラ(pellagra)はナイアシン欠乏によって生じる疾患で, 古典的3徴のDementia(認知症), Diarrhea(下痢), Dermatitis(皮膚炎)として知られる. ナイアシン補充が奏功する反面, 診断・治療の遅れはDeath(死)に至る点で4D diseaseとも言われる. ペラグラはイタリア語で, 荒れた皮膚(pelle:皮膚+agra:荒れた)を意味し, ナイアシン欠乏が日光過敏性皮膚炎を誘発することに由来する.

ヨーロッパ世界がアメリカ大陸を発見し, そこからもたらされた新穀物の一つであるトウモロコシが, 特に貧農の主要穀物として定着してゆく中

でペラグラは発生した. その最初の報告はスペイン医師Casalである. 頸部周囲のペラグラ皮膚炎は, 「カサルの首飾り」として知られる. 同じ頃, 北イタリア農民の間にもペラグラが蔓延し, この名称が世界的に知られるようになった. 北イタリアでは挽いた穀物を水や牛乳で煮た粥(puls)で食する文化がある. それが郷土料理ポレンタ(Polenta)である. ポレンタの主材料は元来, スペルト小麦, 黍, 粟などだったが, 栽培が容易で生産性の高いトウモロコシにやがて取って代わった. 北イタリアは集約農業に適し, パンの原料の小麦は商品作物として栽培され, トウモロコシのほぼ倍の価格で取引された. トウモロコシを主食とする同地域の貧農にペラグラが蔓延し, 特に若年女性の罹患率・死亡率の高さが深刻となる. イタリア医師の間でその原因究明と対策確立は重要

課題となり、一時イタリアはペラグラ研究で世界をリードした。一方、アメリカ合衆国では特に南部15州を中心に、20世紀初頭から数十年にわたりペラグラが蔓延し、社会問題となった。19世紀半ばに北部州と南部州の政治的・経済的な対立から勃発した南北戦争(1861-1865)で南部州は敗北し、甚大な損害を被り、多くの中小農家が働き手や財産を失い没落した。戦争に勝利した北部州は、戦争の大義とした「奴隷解放」を実行したが、それは表面的であった。奴隷は解放後も多くは生活の糧に労働力を提供することでしか収入を得られず、土地や財産を戦後も維持できた地主たちと労働契約を結んだ。これがsharecropping(シェア cropping:分益小作)制度である。これは土地の賃料と貸農具、種などの代金を農民が収穫物で地主に支払う制度で、1870年代には南部に定着した。だが地主は小作人に契約で綿花生産を強制するなど、小作人には隷属的な制度だった。戦前から南部は綿花を主要輸出産物として利益を得ていたが、戦後、綿花栽培への強制はさらに徹底され、黒人ばかりか白人農民までもがこの「債務奴隷制」に陥っていった。こうした貧農の食事が、俗に3M [Meat (豚背の脂身), Meal (コーンミール), Molasses (糖蜜)] と呼ばれる安価で栄養的に偏った食事で、これがペラグラ蔓延の温床となる。ペラグラがsharecropper's plague (分益小作人の疫病)と言われるのは、この制度と、これが招いた貧困の悪循環の結果である。

アメリカ南部のペラグラ蔓延を覚知し、警鐘した人物がJames Wood Babcock (1856-1922)である。彼は南部で生まれ、南北戦争下と戦後の南部で成長し、精神科医として研鑽を積み、南部South Carolina州Columbiaの精神病院院長となった。1907年、精神症状に加え、皮膚・下痢症状を呈した入院症例を経験し、当時ペラグラが蔓延していたイタリアなどの専門病院・施設を歴訪し、自験例がペラグラであることを確信する。そして1908年Columbiaで英語圏初のペラグラ会議を開催し、ペラグラが南部諸州で蔓延し、多数の死者が出ていることを明らかにした。ペラグラの原因究明と対策に心血を注いだのが、Joseph Goldberger (1874-

1929)である。当時、ペラグラの病因論については、感染説、栄養因子欠乏説、カビ毒素説、遺伝説など諸説が提唱されていたが、1914年から南部で精力的な調査を行った彼は、栄養摂取の問題と見抜き、その立証のため主に4つの研究を立案・実行する。①孤児院の食生活を変更し、ペラグラ発症抑制を実証、②刑務所囚人の志願者を募り、南部の典型的食事を約半年間継続し、ペラグラ発症実験に成功、③ペラグラ感染症説に対する検証実験:健康ボランティアに対する感染実験、通称“filth party”(汚物パーティ)。ペラグラ患者の排泄物・血液・皮膚落屑をボランティア16名に塗布・溜飲・筋肉内注射。実験は計7回実施し、彼自身は全実験に参加。参加者のペラグラ発症は皆無であった。④南部7村の徹底した疫学調査:農民の経済状況・食料品市場の開催頻度・アクセスを調査し、ペラグラ発症と蛋白摂取との関連を疫学的に立証した。彼は蛋白質に富む食物にペラグラ阻止因子(pellagra preventive factor: PPF)があると洞察し、その因子の同定に邁進したが、1929年腎癌で死去した。1937年ElvehjemらがPPFはナイアシンであることを解明し、20世紀半ばに欧米のペラグラ禍は終息した。しかし、それはナイアシン補充療法が普及したというより、産業革命の進展と二度の大戦で、工業が発展し、二次産業の労働者や兵士として農民が離職し、農業人口が減少したこと、農業の機械化、化学肥料の発明などにより、土地収益性が向上し、食物生産が増え、食物価格が低下したこと、また国民全体の所得が向上し、食物購入が容易になり食生活が向上したなど、社会・経済的变化によるところが大きい。

ところでペラグラの精神症状は、中枢神経系の神経細胞にcentral chromatolysis (中心染色質溶解)という特徴的病理学的変化が生じることに起因する。これは顕微鏡のみ診断可能で、頭部CT/MRI画像検査や、剖検脳でも肉眼的に異常を認めない。1980年代からアルコール性譫妄・精神病と診断、剖検された症例の中に、ペラグラに特徴的な中枢神経病理所見を認めることが、日本の石井惟友、フランスのMichel Serdauらにより報告され、また多くで皮膚炎を欠くことが確認された。現代

ペラグラの多くは、不摂生な食事やアルコール多飲に起因する可能性が高く、また皮膚炎を生じにくい特徴がある。画像検査が正常な上、血清ナイアシン値測定が容易でない点も診断を困難にしている一因である。診断されず、補充もされずアル

コール性譫妄・精神病と誤診され、死亡する例もある。ペラグラは過去の病気ではない。姿を変え日常診療で遭遇する可能性があり、検査、早期診断、治療が容易になることが望まれる。

(令和4年1月例会)

## 我が国の腑分けの歴史と近代整形外科の父・各務文献

今井 秀

### 1. 我が国の腑分けの歴史

腑分けは701年に制定された『大宝律令』で初めて明文を以て禁じられたと推測される。江戸時代に徳川幕府は朱子学を官学に採用し鎖国政策を断行した。それゆえ儒教の「招魂再生」死生観から腑分けはいっそうタブーとされた。

ところが8代将軍吉宗の享保の改革で、1720年にキリスト教以外の洋書輸入が解禁され西洋の解剖書が流入し、また1742年に制定された「御定書百箇条」で罪因ごとの処刑方法が細かく規定され、死罪は斬首後財産が没収され死体は試し斬りの後埋葬や弔いも許されなかった。しかし山田浅右衛門で知られる御様御用には、試し斬りに準じて腑分けも許可されたようである。

そのため、山脇東洋は官許を得て1754年に我が国で初めて京都の六角獄舎で行われた腑分けに立ち会い、5年後に『蔵志』を著した。この東洋の実証的科学精神はその後の我が国における医学発展の口火を切った。

1771年には杉田玄白と前野良沢らが江戸千住の小塚原刑場で行われた腑分けに立ち会い、所持していた『ターヘル・アナトミア』の解剖図の正確なことに驚愕し、この書の翻訳を志し三年半の苦難の末に『解体新書』が刊行された。これは我が国における蘭学勃興の端緒となり、近代医学の幕開けとなった。

### 2. 整骨医による腑分け

江戸時代後期に整骨医二人が腑分けを行った。ひとりとは広島星野良悦で、1792年に広島藩から

海賊の刑死体二体を貰い受け一体で内臓を観察し、もう一体で全骨を得て「星野木骨」を作製し、1800年に幕府医学館に献上した。

もうひとりとは大阪の各務文献で、はじめ産科を志し1800年に官許を得て大阪葭島の今木刑場で橋本宗吉の絲漢堂の仲間・伏屋素荻と大矢尚齋と共に腑分けを行い『婦人内景之略図』を著した。しかし文献はこの解剖に満足することなく次第に人体の骨骸に興味を抱き、整骨医こそやりのある新しい分野だと考えた。

### 3. 整骨医を志した各務文献

文献は『整骨新書』凡例の冒頭で「整骨ノ術ハ醫門ノ一科ニシテ、救済ノ道ニ志ス者識得セズンバアルベカラズ」と述べているように整骨医を志した。

昭和3年の大阪史談会で、浅田宗伯高弟の中野康章は「文献嘗て整骨を難波村の整骨師伊吹堂年梅氏に就いて尋ねた。然るに年梅これを伝えなかつたので、文献は“これ骨格の連絡を知らざるにあり”と怒を發した」と語っている。

文献は早速年梅佐左エ門に入門したが、年梅氏は支那の陳腐な言を守り経験に頼り施術を行い、それを奥義として術を教えなかつたので整骨術は真骨による骨関節機構の研究より始めるほかないと文献は刑屍の解剖を志したという。

### 4. 木骨の作製から整骨術への応用

妻の黒井氏とともに文献は夜陰に紛れて葭島の刑場から屍体を持ち帰り真の骨骸を収集し解剖し